



雪に映る陰影が美しいシラカバの林—札幌市南区で1月22日



(左から) 樹皮を残した木の器。樹液飲料。樹皮から作られたカゴ。灰を釉薬にしてつくられた陶器—いずれも白樺プロジェクト事務局提供



シラカバの価値 再発見



今年4月にオープンした「ジャム&カフェ タムジャム」。家具類だけでなく壁や窓枠、天井にもシラカバの木がふんだんに使われている—東川町で

道内に広く分布するシラカバの木。草原に並ぶ並木の姿や、雪景色で木々が織りなす陰影の美しさは、道外から訪れる観光客にとっても「北海道らしい」風景の一つだろう。その反面、シラカバが身近にある道民にとっては、春先の花粉をイメーシする人も多い。今、そのシラカバを素材として見直す動きが広がっている。

他の木に比べて幹が細いシラカバは「材木として使い物にならない」と長年言われてきた。白い幹の中心部に赤褐色の模様があったり、黒い筋が入ったりしていることも敬遠される理由だった。柔らかい木というイメージもあり、砕いてチップにして安価で取引される材料だった。

国内では戦後復興や高度経済成長のため、大量の自然林が伐採された。代わりに針葉樹が植林され、良質な広葉樹は激減した。その後、木材輸入の完全自由化により海外から安い木材が入ってくると国内の林業は衰退し、特に広葉樹は輸入に頼る割合が高くなった。近年、世界的な供給不足などによって木材価格が高騰し、国産材への注目が高まっている。最近の研究で実はシラカバは密度が高く、家具材として人気のサクラなどと同等の強度があることが分かった。個体差がある模様も木々の「個性」として許容する人も増えた。

シラカバは道内では更地に真っ先に生えてくる木と言われるほど、生命力が強い。広葉樹の中では人の手で効率よく育てられる可能性のある数少ない樹種だ。シラカバの価値を再評価し、持続可能な北国ならではの材料として根付かせよう。と、「白樺プロジェクト」が2018年、研究者や林業従事者、家具職人らによって旭川市に発足した。

東川町の家具工場「木と暮らしの工房」では、シラカバの合板や無垢材を使ったソファや保育施設から遊具まで、注された遊具を制作していた。工房代表でプロジェクトメンバーの鳥羽山聡さん(33)は「当初はシラカバの印象も良くなくて、何から手をつけたらいいか悩んだ」と振り返る。試行錯誤を重ね、19年6月の旭川デザインウィークにシラカバ専門ブースを設け、ダイニングセットや樹皮をらせん状に巻いたイスなどを販売したところ、多くの反響があったという。

鳥羽山さんは「広葉樹は多種多様で資源の把握も管理も難しい。太くて優良な樹種ばかりを利用しようとすると資源の回復が追いつかず、生態系を乱すことにもなる。短い周期で人の手で育てられるシラカバを上手に使うていくことが、持続可能な森林利用の大きなヒントになりうる」と話す。

樹液は飲料や化粧品、水葉は染め物の原料、樹皮はカゴの素材になり、焼いた後の灰は陶芸品にもなる。一本丸ごと利用できる素材がシラカバだ。道内にありふれた白い木々が、未来に豊かな暮らしをもたらすかもしれない。



シラカバの木を使った遊具をつくる「木と暮らしの工房」の鳥羽山聡さん(左)ら—東川町で

【写真・文 貝塚太一】